



聖歌集改訂ニュース

大斎節から復活節の聖歌をうたう

2001年の大斎節は2月28日から始まっています。復活日までの間、さまざまな大斎節の過ごし方がなされることでしょう。この期節に必ずといってよいほど言われる「大斎克己」とは、自分に打ち勝つように努めることなのですが、古今聖歌集の「大斎節」の項目に収められている聖歌の歌詞をみると、ほとんどが「罪の悔い改め」が中心テーマになっています。もちろんそれはとても大切なことです。しかし、祈禱書の改正に伴い「大斎節」のとらえかたに変化がみられるようになってきました。これまでのように「してはならないことをしないようにする」のではなく、「しなければならぬことをする」というのが、大斎節の意味するところだと言われるようになってきました。今までとは強調点がちがうことに気づかされます。

そこで聖歌集改訂委員会では、大斎節が「復活日に洗礼を受けるために準備してきた志願者が最後に迎える期間」であることや、「すでに洗礼にあずかった者も共に復活の喜びにむけて祈るとき」としてとらえること、そして「教会や個人がひたすら罪の懺悔を求める期間ではなく神の愛されるこの世界との営みであることを主張していくこと（森紀旦著『主日の御言葉』より）などを意識して改訂作業をすすめており、また各個教会で、それにふさわしい聖歌が選ばれ、歌われていくことを

願っています。今までとは違って「しなければならぬことをする」という視点にたつて大斎節を過ごした後にはやってくる復活の喜びは、いままで以上に解放された希望の喜びにつながることでしょ。

『改訂古今聖歌集試用版』では、大斎始日・大斎節にふさわしい曲として、「十字のしるしの灰を受け」が採用されます。言葉のとおり、「灰の水曜日」であることをおぼえつつ復活日に向けて洗礼をのぞむ内容が歌われています。

復活節の聖歌は、これまでに改訂委員会よりいくつかの曲譜をそれぞれの教会にお送りしたことと思います。たとえば「暗い冬は過ぎ（与主同去歌）」では、今までにない復活への憧れが歌われています。また「香油もつマリアは」は、まさに復活日当日の聖書日課（C年）に対応するものです（ルカ24：1-10）。昨年12月に配布しました『改訂聖歌集試用版より』には「おまねきください、主よ」が収められています。古今聖歌集にはエマオへの道を題材に扱った聖歌はありませんでした。引用聖句のルカ24：13-35を聖書日課との対応で見ると、復活後水曜日の福音書、復活節第3主日特禱とA年の福音書に該当することがわかります。

ここであらためていうまでもなく、主日に歌われる聖歌は、可能な限り、変化していく宣教福音理解や神学的発展に基づき選ばれる

ことが大切です。言葉や旋律が今までの古今聖歌集とはずいぶん違うものもあり、教会によっては実際に取り入れにくいこともあるでしょう。しかし、改訂の本質的な意味は、ただ古いものを新しくするというのではなく今の教会に求められている福音理解を反映しているものであるということをおぼえていただき、各個教会においていろいろな試みをしていただきたいと思います。

『改訂ニュース』に添付された『改訂聖歌試用版』を1ヶ月に1曲ずつでもとりいれてみてください。礼拝に歌うのが難しい状況ならば、礼拝後に歌ってみる...というのはいかがでしょうか。歌ってみての感想や提言をお待ちしています。皆様方からのリアクションのひとつひとつが礼拝を豊かにすることにつながっていきます。

司祭 クレメント 大岡 創
(和歌山聖救主教会)



【公募審査を終えて】

聖歌集改訂委員会では11月の第47回全体委員会で、昨年7～9月に実施した公募の審査を行いました。たくさんの応募、本当にありがとうございました。

今回は《聖歌第三次公募》《朝夕の礼拝のための礼拝式文用曲譜の作曲公募》として、初めてチャントの「作曲」の公募も試みました。以下、《聖歌第三次》と《チャント作曲公募》に分けてその結果をご報告いたします。

まず《聖歌公募》ですが、第三回となる今回は【朝・夕の礼拝】【収穫感謝】【子供を視野に入れた、また若者の視点からの「みんなで一緒に献げる礼拝のための」聖歌】という3つのテーマを設定しました。特に【朝・夕の礼拝】は「聖職の不足、という事実直面する中で毎主日聖餐式を献げることが困難になっている場合がある」現状に照らし、チャント作曲公募と併せ、朝・夕の礼拝をより豊かなものにしたいという狙いがありました。

応募総数は27編で、第一回(学校等からの大口の分を便宜上差し引いて)31編、第二回が26編でしたから、これまでと同程度の数の作品が寄せられたこととなります。曲がついた形での応募はうち6編でした。

テーマ別にみますと【朝・夕】またその両方を同時に盛ったものが合わせて10、【収穫感謝】をテーマとしたものが6、【子供】が6、更に「結婚」や「愛」など今回のテーマとは無関係な作品も5編にのぼりました。

応募者数は10名で「リピーター」が4名、今回初めて応募してくださった方が5名と前回同様、半々という結果でした。一人あたりの応募作品数では最大限、つまり6編応募された方が2名、5編が1名、3編が2名。そして4名の方が各1編の作品を寄せてくださ

いました。また年代別では80代が1名、60代が4名、50代が1名、40代が2名で、日曜学校の生徒さんからの応募が1編あったものの、これ以外で10代・20代の応募はありませんでした。なお、この生徒さんを除いた男女比は3:5でした。

教区別では東京・中部・神戸からの応募が各2名、横浜・京都・大阪から各1名。残念ながら北海道・九州・沖縄からは、今回もまた応募がなかったこととなります。

教役者からの応募は今回も主教1名、司祭1名、計2名の応募に留まりましたが、結果的にはこの2名の方々の作品が入選・佳作各1編を占めることとなりました。

入選作の「天と地と海 生きものすべて」は、この詩だけ読むと助詞のない文体、断定的な表現に見えるのですが、歌うことでそれらが緩和される例の一つです。また佳作となった「地球は大きな畑だ」は改変の可能性があるため初行のみを発表いたしますが、大胆な歌い出し、また収穫感謝の詩として正義と平和をも含んだ視点が高く評価されました。

入選作・佳作ともに収穫感謝の内容のものとなり、その他のテーマで入選・佳作が得られなかったことは残念ですが、特に【収穫感謝】をテーマとした作品の多くが固定化された収穫感謝の理解を歌っている事実には驚かされました。また【子供】で期待したのは「子供っぽい言葉で大人の信仰を歌うもの」ではなく「平易な、子供でも判る言葉でわたしたちの信仰を歌うもの」であり、いわゆる「子供聖歌」を募集する意図ではなかったのが伝わりにくかったかも知れません。

次に《チャント作曲公募》は、祈祷書の朝・夕の礼拝で「歌われることを想定している」いわゆるカンティクルを対象としました。

応募総数は11点でしたが、うち8編は聖餐

式の曲譜、また朝の祈りのカンティクル「主への賛歌」も今回公募の対象でない(祈祷書は「朝の祈り」が歌われていることを想定していません)ため、審査対象からは除外せざるを得ませんでした。その結果審査対象は賛美の歌・シメオンの賛歌に作曲された2名の方の各1編、計2編となりました。

音楽的には一切条件を付けませんでした。評価にあたっては「会衆にとっての歌いやすさ・奏楽者にとっての弾きやすさ」「喜び、感謝の音楽としての表現力」「その旋律であるべき必然性」という三点を考慮した結果、楽譜と首っ引きでないと歌えない、技術的に難度が高すぎる、といった理由で誠に残念ながら入選・佳作共に得られませんでした。

(文責 書記 鈴木隆太)

【本の紹介】

今回は世界の賛美歌集探訪をお休みするかわりに、聖歌に関心のある方々にお薦めの本をご紹介します。

日本では今まで賛美歌学の分野が確立されていっていませんでしたが、現在賛美歌学に力をいれ、活躍されている横坂康彦氏が、いかに20世紀の賛美歌が豊かになってきたかを、歴史を辿って書かれています。氏は米国聖公会の聖歌集「Hymnal 82」出版の際には、編集長のR.グラヴァー氏の右腕になられた経験の持ち主。現代に活躍する多くの賛美歌作家との直接の交友関係をもたれ、賛美歌が生まれてくる背景にも入り込む興味深いものになっています。

「現代の賛美歌ルネサンス」

横坂康彦著 日本基督教出版局

2900円

聖歌第三次公募

入選作品 (2000年9月)

【収穫感謝】 古本純一郎 (1933-)

- | | | |
|---|----------------------------|----------------------------|
| 1 | 天と地と海
神の創りし
その見事さは | 生きものすべて
愛の賜物
賛美あるのみ |
| 2 | 創られしもの
これを用いて
神にかたどり | すべて良しとし
よく治めよと
人を創らる |
| 3 | 人は耕し
主は日を照らし
地の産物は | 種蒔き育て
雨を降らせて
豊かに実る |
| 4 | 神に従い
互いに助け
豊かな糧に | 自然を愛し
分かち合うとき
飢える者なし |
| 5 | 命あふれる
平和に守るは
調和を乱す | 自然と大地
我らの努め
悪を許さず |

聖歌第三次公募

佳作入選作品 (2000年9月)

【収穫感謝】 奥 康功 (1940-)

「地球は大きな畑だ」



【添付楽譜の解説】

今回は大斎、復活の聖歌を中心におとどけます。比較的伝統的な聖歌が多いのですが、讚美の内容から、この期節にふさわしい聖歌です。

2000-26「十字のしるしの灰を受け」

大斎始日(灰の水曜日)の礼拝から始めて、大斎節中いつでも用いられるように作られたものです。大斎節とは復活日を迎える準備の時です。悔い改める罪とは、個人とこの世界の罪であり、わたしたちは、前方に輝く復活日の光に照らし返された紫の40日間を意義深く歩いていきます。復活日に洗礼を受ける志願者の準備の日々でもある大斎節は、すでに受洗しているわたしたちの信仰的学びの時でもあります。聖金曜日(受苦日)を通して初めて喜びのイースターとなります。曲は古今72番です。

2000-27「十字架にかかり」

「スタバト・マーテル」(御母はたたずむ)と呼ばれ、中世後期に礼拝で用いられるようになりました。18世紀初頭のローマ・ミサ典礼書では、聖母マリアの記念の日(特に「聖母の7つの悲しみの日」の2つの日)に歌われ、大切にされてきました。この聖歌がどのように使用されてきたか、作詞者は誰かについて、種々の解説があり、複雑な経緯をもった聖歌ですが、十字架のイエスをその下で見守る聖マリアの悲しみがせつせつと歌われ(ヨハネ19:26)、その心情の描写、リズムの美しさなどから、他の言語には翻訳できないと言われるほどのすぐれたものです。彼女はシメオンに預言されたように自身の心を剣で刺し貫かれたことが示されます(ルカ2:35)。しかし、イエ

スの死は人類の救いという神の愛の業でした。聖マリアの姿は十字架に対するわたしたちの信仰をじっくりと奮い立たせます。聖週の聖金曜日(受苦日)にしか歌われなかった『古今聖歌集』91番ですが、これからはどうぞ広く親しまれますように。

2000-28「主はよみがえり」

「古今聖歌集」第111番・第二譜と同曲のドイツのコラールで、今回の詩は「古今」よりも結びつきが古いものです。「おりかえし」部分の使い方については、楽譜に記してある通り、
a)毎回、楽譜のまますべてを歌ってもよいし、
b)最後に一回だけ歌うことにしてもよいし、
c)まったく歌わないでもよい、
という選択肢があります。礼拝の状況に応じた使い方ができます。

2000-29「主の復活、ハレルヤ」

北タンザニアのハヤ族の民族音楽から生まれた復活の聖歌です。100年以上のキリスト教の歴史のあるタンザニアでは、1960-70年代には讃美歌の歌唱において民族音楽を延ばす運動がおきました。1966年にスワヒリ語で書かれたこの聖歌はドイツ語に訳され、早くから世界に広まったものです。

訳詩は讃美歌21のものをそのまま使わせていただいておりますが、日本語のイントネーションと音楽との関係を考え、記譜を多少変えています。

墓・死・憂いを打ち破り、死のとげを滅ぼす復活の主イエス、人類を救う神のみ業をハレルヤと讃美します。もともとは結婚式の踊りの曲、生き生きとした復活の喜びをテンポよく歌いましょう。

2000-30「香油を持つマリアは」

週の始めの日の朝早く、香油を持って、主の墓を訪れた女性の一人であるマグダラのマリアの視点による復活の歌です。七つの悪霊を追い出していただいて以来(ルカ8:2)、主の旅につき従ってきた彼女は、主の十字架上の死にも立ち会いました。そして墓の前で彼女は、復活の主イエスから「マリア」と声をかけられ(ヨハネ20:16)、世界で最初の主の復活の証人となりました。原詩で各節に繰り返される、「香油を持つマリアは、イエスを捜し求める」という言葉が、荘厳かつシンプルな旋律に彩られて、つねに主のみそば近くに居るために歩み、そして主の復活を証したマグダラのマリアの、静かな力強さが表現されています。

2000-31「主は昇る 高く」

復活から、永遠の住まいへと昇天される主を高らかにほめ歌う詩が、前半、後半のそれぞれ繰り返しのあるフレーズで、よく構成された曲につけられた堂々とした聖歌です。3年前の礼拝音楽担当者会で宿題として各教区に訳詩をお願いし、その中から神戸教区の応募作品を土台に、委員会で完成した詩です。現行古今聖歌集では、ドイツコラールは、リズムをそろえた形で歌ってきましたが、最近ではしばしばオリジナルのリズムで歌われます。古今の251番と増補版22番を比較されるとよくわかりになるでしょう。同じ曲です。四声のハーモニーもきれいですが、伴奏はやや難しいので、ソプラノをベースラインだけで支え、ユニゾンで力強く歌うのもよいものです。

2000-32使徒の祝日

「われらほめうたう」

使徒の祝日のためのこの聖歌は、『古今聖歌集』151番にある「使徒の聖日」の歌よりも、詩は古く、4世紀のミラノの主教アンブロシウスの手によるものとされています。アンブロシウスは、西方教会の典礼と聖歌を革新し、キリスト教賛歌の父とも呼ばれている人物です。使徒から受け継いできた(使徒継承の)教会のわざが、王なるキリストの永遠の賜物であることを、感謝し賛美する内容となっています。『古今』151番が、使徒たちの人となり思いを馳せることのできる歌であるのに対して、今回の聖歌は、使徒職の権威ある行いを讃えている点で、教会史的な広がりを持つ重要な歌となっています。

曲は、現代の作曲家によるものですが、詩の内容に見合った堂々としたものです。

2000-33

「神のみ住まいのうるわしさよ」

言うまでもなく、詩編第84編を韻文化した聖歌です。米国のHymnal '82からの訳詩ですが、この詩編のエッセンスがうかがえます。主のみ住まいを慕い求め、そこに憩う喜びを熱く歌う讃美の聖歌です。元々、ユダヤ教の時代から聖歌として歌われたのは詩編ですし、今のような定量の形になった最初の聖歌もやはり詩編です。

2000-34「父なる神よ」

20世紀は「教会一致運動」(エキュメニカル・ムーブメント)の世紀と言われ、この方向は今世紀も続けられていきます。主イエスは十字架をひかえ、父なる神に祈られました(ヨハネ

17章)。その中で「すべての人を一つにしてください」と祈られ、この言葉が運動を支えるものとなっています。世界に広がる教会は主イエスにあっては一つです。しかし、目に見える形で一つになることが神の願いです。「キリストの体」(教会)を分裂させたわたしたちは、その罪を悔い改めなければなりません。分裂の状態は、この世界に働かれる神の宣教を妨げる結果となっているからです。エキュメニズムとは単に教会だけの一致を求めるのではなく、被造物全体が神にあって一つになることを最終的な目的とします。それを成し遂げてくださるのは神です。

2000-35「タリタ・クム」

会堂長ヤイロの娘が、主によって癒されるという奇跡物語(マルコ5:21~24、35~43並行)をモチーフにした歌です。「タリタ・クム」はアラム語で「少女よ、起きなさい」という意味。これを、おりかえしで歌い上げ、その終わりに「自分の足で立て」としめています。主に癒された娘が、「もう12歳になっていた」(マルコ5:42)ことへの注目から、彼女の自立に重ねて、歌う者には、自立した信仰への目覚めが促されます。1節は、主イエスからの呼びかけ、2~3節で、それに応える形で、癒された者の賛美が歌われます。超教派賛美CD『UNITY!』で広く紹介された、日本人の手による賛美の歌です。

2000-36昔 主イエスはガリラヤの」

2000-37「愛する者の死を悼み」

この2つは聖歌第二次公募佳作入選作品(詩のみ)に、新しく曲がつけられたものです。いずれも、古本純一郎氏(現首座主教、神戸教区主教)の詩に、宮崎尚志氏(作曲家・立教学院

諸聖徒礼拝堂)が書き下ろした日本聖公会オリジナル聖歌です。これらが公募入選した大きな理由に、聖書の出来事や主イエス様のみ言葉が、それぞれの礼拝の意図にふさわしく歌われていることが挙げられます。

聖婚式の歌は、ヨハネ福音書2章の「カナの婚礼」に列席した主イエス様の奇跡物語をモチーフにしています。喜びにあふれた旋律で、愛する二人への祝福が歌われています。

また、葬送式の歌は、「私は復活であり、命である」という主のみ言葉(ヨハネ1:25~26)、会堂長ヤイロの娘のよみがえり(マルコ5:22~24、35~43並行)、ナインの寡婦の息子のよみがえり(ルカ7:11~17)、ラザロの復活(ヨハネ11:38~44)、そして「道、真理、命」なる主(ヨハネ14:6~7)が、各節で歌われます。復活と永遠の命への希望が貫かれているのです。「ハレルヤ」を前後に歌い上げることにより、重厚な曲になるので、復活節にもふさわしく用いることのできる聖歌です。



【試用版についてのQ & A】

Q: 試用版は何曲位の規模ですか?

A: まだ作業中の聖歌もありますが、120から130曲の間になるでしょう。

Q: どんな内容の聖歌が入るのですか?

A: 教会暦に沿った聖歌で、現在の礼拝の理解に合うものが現行の古今聖歌集には充分にないものは言うまでもなく、三年周期になった聖書日課に対応する聖歌をできるだけ入れるように作業を進めています。

Q: 新しい曲ばかりですか?

A: 新しい曲を中心に紹介する予定です。現在のところは各国の聖歌からの翻訳が主ですが、公募で採用した聖歌を含め、作詞作曲ともに日本のものが全体の約一割です。因みに12月にお送りした「聖歌集改訂ニュース」に添付しました聖歌25曲のうちオリジナルは6曲、現行古今聖歌集からの改訂は3曲です。

Q: "新しい"というと、どうしてもギターで弾くとか、繰り返し歌う短い聖歌のようなイメージがありますが。

A: もちろん詩の内容や、曲想によっては、ギターなどを用いた方が表現し易い場合もありますが、ここで新しいというのは、まだ紹介されていないということです。例えば先ほどの25曲の最後のアメ・ジンググレースは、18世紀に英国で生まれ、19世紀に米国で大衆的な曲につけられてから、非常に広く愛されるようになった曲です。聖歌は私たちにとって、音楽の印象がとても強くなるようですが、詩の内容にも注目することが更に大切でしょう。委員会でもできるだけ、皆様が"親しみやすい曲"そして、"よい曲"を取り入れたいと、いつも願っているのです。

Q：聖歌集の体裁は？

A：大きさ、楽譜の書き方、トピック、作詞作曲者名など最新の改訂ニュース添付楽譜が見本です。大きさはA5、歌詞は節数が非常に多い場合以外は全節楽譜の中に入るほか、詩としても読めるように、楽譜の下か向かいの頁に載せます。内容だけではなく、ひとつの聖歌についてのトピック、作詞、作曲者の名前の配置など、すべてを試用版として見ていただきたいと思います。

Q：チャントは？

A：現在のところ、朝夕の礼拝の詩編やカントイクル(賛美の歌、マリアの賛歌、etc.)など「歌い、または唱える」とルブリックにあるものを準備しています。音楽的な側面からいうと、キリスト教の宝ともいえるグレゴリアンチャント、聖公会の大切にしてきたアングリカンチャントに、オリジナルのものを加え、最低三種類を用意する予定です。現在はまだ十分に揃っていないとはいえないので、今後優れたオリジナル曲が出てくることを期待し、体裁としては別冊差込の形を取るよう考えています。

改訂委員会では皆様からのご質問、ご意見をお待ちしております。皆様のご関心事は紙上で取り上げたいと考えております。

新しい聖歌を礼拝に採り入れることは、教会によっては至難の業と思われる司祭さんや音楽関係者の方があることでしょう。確かに導入の仕方がとても大事です。一方で、私たちが捧げる感謝、賛美の礼拝、その礼拝のテーマとなることにピッタリした聖歌に出遭った時に、どれほど深められるかも素晴らしい体験です。

(聖歌集改訂委員・加藤啓子：聖公会新聞2月号の記事の一部を加筆転載)

【全体委員会から】

今年に入って一月末、2月21、22日と2度の全体委員会を開きました。この委員会の一番大切な部分は、ひとつひとつの聖歌を最終的に採用するか承認することです。

委員会で翻訳、訳詩、あるいは作曲などしてここまでくる聖歌、紹介されたもの、公募でとったものなど様々ですが、最終的にこれで決まるとなると、一語一語がこれでよいのか、ことに音楽とあわせたときにどうか、なかなかスナリとはいきません。日本語のもつイントネーションと音楽のリズムとが無理なく合わさることはなかなかなく、そこで、また詩を変更ということなどが度々起きてくるわけです。

このような作業に多くの時間が必要にもかかわらず、実際は一曲一曲の現在の進捗状況の把握(本当にペンテコステまでに試用版が出せるのか!)や、いかに歌い易い楽譜にするか、曲譜の表記の細かいところ、承認された聖歌の詩の部分の書き方(漢字を使うか否か、ルビは必要かなど)はどうするのかなど、実に細かいことの話し合いもあり、長時間の委員会でもまだ時間が足りないという感じがあります。現在は可能な限り多く詩部門を開き、内容の充実した聖歌づくりをめざしています。

信徒の皆様のお支え、お祈り、お励ましに心から感謝しております。

発行：聖歌集改訂委員会

ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで
〒162-0805 東京都新宿区矢来町65
TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175
E-mail: hymnal.po@nsskk.org